

摂理(JMS)における伝道の進め方

摂理脱退者 YANTA 著

この文章は、摂理に数年間携わり、摂理の抱える問題の核心がその隠蔽体質にあると考える著者、私が、その問題改善に向かうことを意図して記すものです。そのためには、摂理内部から外部への情報公開と、摂理外部から内部への情報流入が必要であると考えます。

この文章により、摂理に導かれる人たちや、見守る家族・友人が十分な情報のもとで冷静な思考と判断ができること、また、現在なお摂理で活動している人たちがこの問題と向き合い、正しく思索すること、そして、社会のより多くの人が摂理の存在と実態を認識し考える機会を持つことを願います。

摂理が宗教団体としてその信仰者であるメンバーを増やすプロセスを「伝道」と呼びます。その様子を以下に示します。

伝道のプロセスとして、

- 1、勧誘
- 2、把握・管理と関係性の樹立
- 3、証し
- 4、BS(Bible Study:30講論)教義の教育
- 5、信仰の確立
- 6、礼拝
- 7、メンバーとしての活動

と大きく分けられます。

摂理では、信仰者として確立し、摂理の側として活動するまでの、勧誘から管理され、教育される期間にいる伝道対象者のことを「新入生」と呼び、「NC(New Comerの略)」で表記したり、「新しい命」と呼んだりもします。

摂理に導かれる大多数の人は、証しの時まで宗教の関与を知らないし、礼拝に出てメンバーとして活動しだすまで宗教団体に所属するようになったことを知らないだろうと思います。また、自分が、サークル活動の裏では新入生として扱われ管理されている対象であることも知らないでしょう。

以下に、摂理での伝道の様子を、「伝道の媒体」・「伝道のプロセス」・「伝道の意味」に項目を分けて記します。

伝道の器、部署活動

摂理の社会的に、表向きに見られる形が部署活動です。サークル団体などの形をとりますが、主なものとして以下にあげます。

- ・バレーボール、サッカー、バスケットボール、野球などのスポーツサークル
- ・コーラス、アカペラ、ゴスペル、楽器、バンド、演劇、チアダンス、モデル、勉強会、美術などの文化芸術サークルや団体
- ・ボランティアやNPOなどの社会的団体

これらの団体はその管轄において、各教会に所属するバレーボール・サッカー・ゴスペル・勉強会などの「教会部署」と、関西では各教会からメンバーが集まり、参加して運営している「全体部署」に分類できます。

これらの団体には、摂理や各教会名とはわからないように、それぞれの名前がつけられています。

関西の全体部署としては、「ギデオン(サッカー)」「ラルス(バスケットボール)」「コール芽音(コーラス)」「和実音(アカペラ)」「エイレネ(楽器)」「HONEY(バンド)」「実作多プロデューサー(演劇)」「トパーズ(チアダンス)」「(モデル)」「美美(美術)」があります(2004年1月現在の情報。各団体名は変更されることがある。)

これらの部署活動に大学生を中心に人を勧誘して伝道を進めています。最近では、伝道のターゲットとして高校生といった低年齢化がチアダンスやモデルといった部署を中心に進んでいます。

文化芸術系の部署は、コンサートやライブやイベントなどの発表の場を用いての伝道が見られます。公共の施設を借りてのコンサートや芸術祭が、教会部署、全体部署ともに年数回、企画されます。普段の練習活動には、公民館などの音楽室や練習室などが利用されています。

スポーツ系の部署では、摂理での各種目の大会に向けての選手要員としての伝道が見られます。公共のグラウンドや体育館を借りての各種スポーツ大会が、関西全体で年数回、企画されます。普段の練習活動には、大学構内のグラウンドや市民グラウンドや公園、市民体育館などが利用されます。

普段の練習活動以外に、レクリエーションイベントや合宿旅行などが伝道のために企画されることもあります。また、他教会の部署との合同練習や交流試合、ジョイント・コンサートなどにおいて、交流の機会が持たれることがあります。

伝道のプロセス

1、勧誘

勧誘の方法には見ず知らずの人に声をかける「路傍伝道」と、すでにある関係性を利用した「家族や知人の伝道」とに大きく分けることができます。

・路傍伝道

摂理のメンバーがキャンパス内や街頭において、風貌や体格や年齢などといった印象を判断し、見ず知らずの人に声をかけます。会話をしながらその人の様子を把握し、サークル活動(教会部署や全体部署)やイベント(部署のコンサート・ライブや大会や企画行事)に勧誘します。勧誘された人がサークルやイベントに興味を示したら、携帯電話の番号やアドレスなどの連絡先を聞きます。また、次に会う約束を取り付けたりして関係性をつくります。

会話の中でまず、勧誘された人の興味や関心、下宿か自宅かなどの住所に関して、生活スタイルなどをうかがいながら、その人にあったサークルを紹介したりもします。

紹介するサークルの長所として、勝利や楽しさだけの追求だけではなく、精神的な向上を目指していることや、社会人や学生など様々な分野と境遇の人が集まっており、豊かな人間関係があること、他大学のサークル(実態は他教会の部署)との積極的な交流があること、サークル活動時だけでなく、普段の生活の中でも仲が良いことなどをアピールします。

会話の中で勧誘された人の夢や希望、また生活や社会の中での不満などうかがい、そのことに対する答えを与えながら、上記の長所を示しサークルへと勧誘したりもします。

この勧誘の場面で勧誘された人から、宗教ではないのかという疑問が投げかけられても否定をしましょう。メンバーが信仰を持っていることを明らかにすることはまずなく、最大限宗教的要素を隠すように努めます。

できる限りそのサークル名は明らかにしません。また、不特定多数の人への勧誘ビラを撒くこともしません。これは、宗教団体もしくは摂理に所属する活動団体による勧誘ということが、公に対して明らかになることを、できるだけ防ぐためと考えられます。また、不特定多数への勧誘は伝道において管理が困難であり、部署の運営に支障をきたす可能性があるからです。あくまでも個人的に勧誘するのです。

メンバーは数人で声をかけることが多いですが、単独で声をかけることもあります。キャンパスでは昼休みや授業の空き時間や放課後の時間に、勧誘活動に出かけることが多いです。社会人は仕事終わりや土日などの休日の空き時間を利用しています。

メンバーの間では、伝道(勧誘活動)のことを「釣り」(教義上、伝道を釣りで喩える)と表現したり、韓国語で伝道を「チョンド」と発音するので、チョンドやチョンと言ったりします。

・家族や知人の伝道

親・兄弟姉妹などの家族や、友人や先後輩などの知人を勧誘する場合は、すでに信頼関係や情報把握があるなかで進められるので、ある面で路傍伝道より管理しやすいと言えます。

家族や知人に対してサークルやイベントを紹介し、メンバー本人が所属している集団に対しての好意や安心感を与ながら、サークルへ勧誘することもあります。また、とくに家族の場合には、直接的に自らの信仰を告白して、摂理の教義や活動を紹介し、BSにつなげることもあります。

このようなサークル活動を媒体とした伝道において、宗教団体によるものであることを明示しないことの正否を問うことが重要でしょう。摂理ではこのことに対して、「現代社会において宗教には誤った悪いレッテルが貼られており、宗教を明らかにした伝道は、そのような先入観によって頭から拒否される。このことは、本来、万人に必要な本当に善い摂理での救いの可能性を狭めることであり、知恵と謀をもって信頼関係が築けるまで、宗教の存在を明らかにしないことは、伝道されるその人にとって善いことである。」と、その正当性を説きます。

2、把握・管理と関係性の樹立

新入生にはそれぞれ「管理者」としてメンバーがつきます。管理者は伝道の上でのコーディネーター的役割と育ての親的役割を果たします。把握と管理と関係性の樹立は新入生がメンバーになるまでの間、漸進的に進められます。特に新入生がBSを学びだすと、意識がバイトや異性など他の事に向かわないように注意が必要とされます。また、それぞれの新入生の様子は、メンバー間や教会指導者の間で情報共有され、教会を上げてその管理が見守られます。

管理者が中心となって、メンバーたちはその新入生のことを把握するよう努めます。新入生の性格、思想、考え方、宗教観、経歴、趣味、住所、出身、家族構成、生い立ち、将来の目標や夢、悩みや問題、生活スタイル、友人関係、異性関係などなどを聞き、伝道を進め信仰者として摂理に所属できる素質かどうかの判断材料とします。もちろん直接的にあれこれ聞き出すのは不自然ですので、サークル活動の時や食事の時など、普段の交流の自然な会話の中で聞き出すのです。

管理者は、新入生がより摂理でのサークル活動や摂理のメンバーとの交流やBSに時間を出し、熱中できるように指導や教育をして管理します。新入生にとってバイトや異性関係やその他趣味などは、摂理のサークルやメンバーとの交流に対する興味を薄らせる可能性があるからです。時間の使い方や物事の考え方など生活規範を教え、メンバーが精神的に生活的に優れていることを感じさせながら、摂理に対しての時間と意識の投資に向かわせます。

また、新入生にもサークル活動の場などにおいて役割や活躍の場を与え、摂理のサークルに対する主人意識を持たせ、参加意欲を高めたり、新入生の人間的成長に対する興味を引き出したりします。またメンバーと一緒に活動を進めることで、関係性を強めていきます。管理と把握をしっかりとする上でも関係性の樹立は重要です。新入生がメンバーに対して何でも話せるという関係ができると、信頼関係の中で証しを受け入れやすくなるし、新入生が抱えている問題などを把握し解決しやすくなります。また、メンバーからの指導や教育を素直に受け入れやすくなります。そのために、電話やメールでよく連絡を取ったり、ともに食事する機会をもったり、カラオケやボーリングやショッピングなどその新入生の興味があることでともに遊んだり、スポーツの後ともに銭湯に出かけたり、下宿している新入生の家に泊まりに行ったりと、メンバーは積極的に新入生と時間をともにして関係性を強めていきます。関心を持ち親身になって相談にのってくれたり、時間をともにしてくれるメンバーに対して信頼と好意を新入生はおぼえていくことだと思えます。

3、証し

新入生を管理し十分に把握する中で、「その新入生がBSを聞けば、摂理での信仰を持ち、メンバーとなれるだろう」という十分な可能性を、メンバーや教会指導者が見出すことができれば、教会リーダーの判断で「証し」へとステップを進めます。

「証し」とは、神の存在や栄光を示すことが宗教的意味でしょうが、摂理の伝道においては「新入生に対して、摂理の教義の学びを勧めること」として用いられます。つまりBS(バイブルスタディ:30講論)の勉強を勧めることです。

この時点で新入生は初めて宗教的要素を体験するわけですが、あくまでもこれは「聖書の個人的な学び」として勧められ、宗教団体としての摂理の存在は、新入生には明らかにされません。証しの場面では、新入生の管理者もしくは教会指導者から、「聖書から人生の教訓を多く学ぶことができること。聖書の言葉には人生の問題を解決する力があること。聖書を正しく理解するためには、その読み方を教わる必要があること。」などを自らの体験を交えたりしながら説かれ、「抱える人生の問題を解決する方法として、人生をより正しくより良く生きる指針として、世界に通じる教養として、聖書を学んでみないか」などと、学びを勧められます(ゴスペルサークルでは、歌詞の世界観を良く知るためと、勧められるかもしれない)。そして、クリスチャンとして、聖書を教えてくれる人(サークルの顧問的存在である教会指導者など)を紹介されます。

この説明においてもあくまで聖書の学び、読み方を教えるという話であって、摂理独自の教義を教えると言う説明はありません。この時点で新入生に与えられた情報から推察しても、一般のキリスト教であろうとしか認識できないでしょう。ちなみに、キリスト教から見て摂理の教義は異端であり、その信仰者がクリスチャンであるというのは定義から外れていると思われる。

またいくつかの内容に分けて学ぶとは教えられるかもしれないですが、「Bible Study」という名前がついていることや、30講義あることや、どのような内容が伝えられるのかは、新入生が教えられることはありません。

新入生が証しを受ける判断のポイントとなるのは、その新入生の性格面や生活態度、BSを聞き進めてメンバーとなって活動できる時間が充分にあるか、宗教という実態を示した時に受け入れる関係性があるか、摂理にとって有益な存在となるか、信仰を持つきっかけとなりうる人生や世の中に対する問題意識があるか、などの点であって、管理者と教会指導者との相談の上で総合的に判断されます。つまり誰彼問わずBSを勧めるのではなく、メンバーになる可能性の高い者だけが選ばれているのです。それは、証しをすることで、摂理という存在が世の中に明らかにされるというリスクを最小限におさえる為と考えられます。が、摂理のメンバーには「真理という本当に価値の有るものを、価値のわからない人に与えることはできない。今、摂理のメンバーとなる人は新しい時代の基礎・基準となるべき人だから、ふさわしい人を集めなければならない。」としてその理由を教えています。

証しを受けるにはふさわしくないと判断される人は、摂理のサークルなどにおいて引き続き管理され、様子を見られるか、「目指している目標が違うのでは」などの理由でサークルを離れることを勧められるかです。もちろん、その新入生に変化があれば再び証しの候補になります。

証しを受けた新入生が自分の抱える問題を解決したいと思ったり、聖書に対して知識的興味や好奇心が持ったり、証しをしたメンバーや講師となるメンバーに対して十分な信頼や尊敬があれば、聖書の学びをきっと受け入れることだろうと思います。宗教や聖書に対して特別に興味関心が無くても、ものは試しという興味本意や「少しぐらい聞いてみてもいいか」という軽い思いで受け入れるかもしれません。

証しを受け、聖書の学びを受け入れると、BSが始まるわけです。証しのその場で聖書についての序論的な話を聞くかもしれないし、一つ目の講義を受けるかもしれません。そうでなくても、最初の講義のスケジュールを組むことだと思います。

新入生の中にはメンバーと話をしていたら、いつの間にか目の前に聖書があって一つ目の講義がなされていたという事例もあったようです。

その新入生が受け入れやすい形で証しはなされるわけだが、どんな形であれ、その新入生が摂理で信仰を持ちメンバーとなることが最大の目標です。

この証しの場面において、新入生がこの先受けるものに対する十分なインフォームドコンセントがなされているかどうか、伝道の正当性を見る上での重要なポイントであると考えられます。

4、BS (Bible Study: 30 講論) 教義の教育

摂理の教義を教え込むために用意されているプロセスがBSです。これは30個の講義に分かれています。教義内容が出版化されたものは存在せず、新入生は講師から口頭で内容を伝えられます。講義の内容をメンバーや新入生はノートを取りながら聞きます。各講義はノアの箱舟の話やエデンの園の話などといった聖書の箇所や例話から話を導き出し、その講義で教えたい核心のポイントへと論が展開されます。教義は聖書を引しながら、聖句に基づいて教えられます。

最初のいくつかの講義では聖書の読み方について教えられます。これは一般的な聖書読解の方法論ではなく、摂理特有の方法論です。その内容は、比喩としての解釈を重要視するなど、「聖句の字義的意味から大きく飛躍した摂理特有の解釈を可能にするため」という狙いが伺えます。これは、まず聖書解釈の自由な飛躍を保障しないことには、摂理の教義が成り立たないからです。

その後つづく初級・中級・上級の講義では、摂理での聖書観や世界観や歴史観などの基本事項が伝えられます。そして、核心の講義では、「創造目的」や「墮落」や「救い」が何であるかという摂理の教義の核心部分が伝えられます。

この一連の講義の中で導き出され、たどり着くことは「摂理の教祖(鄭明晰氏)が再臨のキリストである」ということです。しかし、このことに関して明示はしておらず、それぞれの講義の中に、それを意図する内容が散りばめられているのです(摂理では教祖が再臨主であることを明言しないことが暗黙の了解のうちにある。)。このBS全体に散りばめられた示唆が集まり、重なった時に初めて、新入生は教祖が再臨主であると認識し、「摂理」に対して信仰を持つようになります。そしてその決定的(?)な証拠として「ひと時とふた時と半時」の講義での聖書解釈があります。

BSで伝えられる内容の意図を分析すると次のようになります。まず、再臨主としての教祖とその御言葉、摂理を必要としなければ人は生きていけないことを認識させる目的があります。霊の存在、御言葉による裁き、サタンの存在などです。

次に、再臨主の存在と必要性とを説き、教祖が再臨主であることを保障することです。十字架による救いの不完全性、成約時代と千年王国、終末論、超自然的奇跡の否定と合理的解釈などです。

そして、キリスト教やユダヤ教を劣視することによって摂理の優位性を得る目的があります。キリスト教の文字通り信仰と無知、異端の概念などです。

BSのほとんどの部分において、キリスト教がその教義で強く説いている神やキリストの栄光や性質についてはあまり触れず、話の核心は「あなたには摂理が必要不可欠であり、摂理は保証されている」というところに向かっているように思われます。

このような内容のBSを新入生は一つずつ聞き進めていきます。講義は普通、教会として使ったり、メンバーが共同生活するための住宅(マンションや戸建)の一室で行われます(場合によっては喫茶店や新入生自身の下宿部屋、大学の空き教室なども在りうる。)。管理者は新入生とスケジュールをあらかじめ決めておきます。

その日時に新入生がそこへ訪れると、メンバーが迎えてもてなしてくれます。講義が始めるに頃良くなると、講義のできる室礼(ホワイトボードやテーブルが用意され、講義の邪魔が入らない状況)のされた部屋に移り「準備」を始めます。

「準備(韓国語でチョンチョウと言う)」とは、新入生が講義に関心がむき、集中できるようにするための時間です。メンバーがイニシアチブをとって進められ、内容はその新入生の進捗や信仰状況にあわせて進められます。まだBSを聞き始めたばかりで、教義や信仰に対してあまり受け入れていないような新入生に対しては、生活の様子や考えを聞いたり、メンバー自身がBSを聞くようになった過程を話したり、教義や信仰に対してわかりやすく説明したり、前回の講義の内容をおさらいしたり、今回の講義の内容に関する話をしたりします。新入生が信仰に目覚め始める頃からは、講義がしっかりと聞けるようにと祈ったり、賛美歌を歌うことが付け加わります。賛美歌を歌うことは、教義的には霊的に整えて力を受けるという意味がありますが、歌うことで精神的に高揚し開放され、自分の考えを述べたり、相手の話を受け入れやすくなるのでしょう。新入生が準備をしている間、講義を伝える講師も別の所で祈ったり、講義内容の最終チェックをしたりして準備をしています。

準備が整うと講師が部屋に入ってきて講義が始まります。新入生に抵抗感が無ければ、講義の始めと終わりは祈りによって成されます。講義はその新入生に向けて伝えられるわけですが、学生メンバーなどまだ信仰の浅いメンバーが同席して、講義を再び学ぶ機会にもされます。講義ではノートを取ることを勧められます。これは教義のポイントを再び読み返すことで認識を深めたり、ただ聞くだけでなく書くことで教義の理解と受容を進めさせるためでしょう。また、メンバーになれば礼拝の説教を文章記録するので、その準備とも見ることができますし、自らが講師になった時の講義案の資料にもなっていきます。

講師は講義を、時に楽しく、時に真剣に、時に理論的に、時に情的に伝えていきます。自分の体験談や世間の話題などを織り交ぜたり、新入生の意見や考えを聞いたりしながら講義を進めていきます。また、ホワイトボードに図表を描いたりしながら説明します。講義は短いもので30分から、長いもので2時間にまで及びます。

講師の立場からすると、いかにして新入生に教義を深く理解させ、摂理で信仰を持つようにさせるかが重点であり、どのようにして再臨のキリストである教祖(鄭明析氏、「先生」とメンバーから呼ばれる。)を受け入れさせるかが、講義の核心です。そのためにBSの講義の中には、それとわからないようにありますが、彼の偉大性を示す説話が織り込まれます。それは、「尊敬している先生」や「偉大な牧師さん」、「この御言葉を教えてくれた方」という形で登場し、「聖書を2000回以上読み、真理を会得したこと」や「70日間の断食により霊界を悟ったこと」、「ベトナム戦争に出兵するも敵の命をも愛し、誰も殺さなかったこと」、「山奥の

貧しい家庭に生まれ、幼い時から山で祈りの修行をしたこと」などが伝えられます。新入生にはその人の名前が伝えられることはありませんし、当然、教祖である事実も伝えられません。が、知らないうちに彼のことを紹介されているのです。そして、教義の内容から再臨主の存在が明らかになるに従って、この御言葉を説き教えてくれた「先生」が再臨主であると、新入生はいつしか認識していくのです。

一回の講義が終わるとそのあとに、新入生はメンバーたちとともに食事などをしてもてなされるかもしれません。そのような時に、メンバーは講義の感想などを聞き把握を進め、また関係性を深めるのです。そして、また次回の講義のスケジュールを決めることでしよう。

講義は学生の新入生であればだいたい週に2～3講義が行なわれるのが一般的でしょう。つまり、順当に進めば3ヶ月ほどでBSを聞き終えることとなります。が、教義の理解が不十分だったり、BSに対する興味が薄かったり問題があれば、講義が一時中断されることもあります。そのような場合には、復習の講義をおこなったり、聖書を読ませたり、関係性を深め管理に努めたりします。忙しくて講義の時間が取れなかったり、教義に対して抵抗があったりという理由で、BSを途中でやめていく新入生も少なくはありません。逆に教義の理解が速かったり、関心が強ければ、1日に2講義を聞き進めたりしていくこともあります。講義のスケジュールリングは、その新入生の管理者が教会指導者と相談しながら、講師の依頼や準備し迎えるメンバーの把握、場所の用意などを進めていきます。教会には複数名の新入生がBSを聞いている状況がありますが、新入生同士が関係を築かないように配慮しながら、教会としての講義スケジュールが組まれます。

5、信仰の確立

BSの講義を聞き進めながら新入生は摂理で信仰を持つわけです。個人差は大いにあるものの、そのポイントはおよそ次のようです。

まず新入生は、聖書は神の書物であると教えられ、神の存在を示されます。次に、「人間の構造(三分説)」という講義で「霊」の存在を示されます。「神の存在を認めない者は霊が死んでいる状態であり、本来の人間のあるべき状態ではない」と説きます。「霊は神から来る御言葉によって生きる。それは聖書でありキリストの言葉である。」と。

摂理の伝道のターゲットである大学生、若者の多くは宗教心を持っておらず神の存在を認めていないのが現状でしょう。そのような新入生に、神の存在を確かにする方法として祈りを教えます。祈りは神との対話です。祈り願ったことがかなえられる体験を通して、新入生は神の存在を次第に受け入れていきます。また、新入生は目には見えない霊の存在を意識し始めます。祈ることや御言葉(講義)を聴くことで霊的な充実を感じることでしょう。また祈らなかつたり、御言葉やメンバーから離れることで不安を感じたり、うまく物事が進まないと感じるかもしれません。なかには霊的な体験(霊が見える、夢に見る、予感があたる、霊の声が聞こえる、感情のコントロールが効かない生体反応など)によって実感する人もいます。新入生は神の存在を認識し、霊の存在を受け入れ、祈りの生活を始めていくようになります。そして講義が進めば、サタンの存在や霊界論や復活論を聞くことで、さらに霊に対する認識と自覚を深めていくことでしょう。これにより新入生は、自分の霊の成長と復活に対して意識がむき、その糧である御言葉の必要不可欠性を覚えます。

また、今の時について、新しい時代の始まりを教えられます。「旧約聖書の旧約時代は4000年間であり、イエス・キリストによる新約時代は2000年間だった。今、新しく成約時代、千年王国が始まっている。」ということを示されます。「聖書にある終末とは世の終わりではなく、時代の転換期を意味しこの現代である。」と。また、「新約時代に救い主として現れたイエス・キリストによる救いは、民の不信のために不完全に終わった。キリスト教の教えにも限界があり、信仰の腐敗が起きている。」と。「そのために再臨のキリストがこの現代に現れ、完全な真理を説き、完全な救いを成される。」と教えられます。

このことにより新入生は自分が出会ったものの価値の大きさを感じるでしょう。自分は神によってその価値あるものに選ばれたと感じるかもしれませんし、この希少なチャンスを逃してはいけな思考えるでしょう。また、現在、生きて働いているキリストと出会うことを望み、その存在についてもっと詳しく知りたいと感じるかもしれません。

そして、BSを通して教えられている再臨主が誰であるのかを新入生は気づき始めていきます。再臨主を認識したのであれば、その人を裏切ってははいけな思考えるでしょう。そこまでの考えにいたれば、もうすでに立派な摂理のメンバーです。その頃にはBSは最後の核心の講義に来ていることでしょう。このようにして「自分には摂理が必要不可欠であるし、摂理のために生きることを望む」という信仰が確立されるのでしょう。

BSを学ぶ途中で新入生は、「教えられたこの素晴らしい真理と世界について、家族や友人に教え薦めてあげたい。」と考えるかもしれませんが、それは許されません。それは、「教義に対する理解が不十分であるのにそれを第三者に対して伝えようとしても誤解を与えてしまい、反対されるだけであり、新入生には迫害の危険性が生じるし、誤解した人の救いの機会をなくすことだ」という理由です。よって、家族や友人にBSを学んでいることは秘密にしなければいけませんし、教義を記したノートや聖書なども目に付かないように管理しなければならないと、メンバーは新入生に教えます。しかしここには、冷静な判断のできる第三者の介入を防ぐという意図が汲み取られます。キリスト教の異端という教義的内容の問題だけでなく、摂理の存在と教祖のスキャンダルが世間に広まることへの危惧が感じられます。このために、新入生やメンバーは家族や友人・知人に対して信仰を隠すようになり、また関係性も薄れていくようになります。そして、ますます摂理内部へと関わりを強めていくでしょう。

6、礼拝

新入生がBSを聞き進めていき摂理の教義を受け入れ、また摂理に対して必要不可欠性を感じ、再臨主が「先生」ではないのかと認識し始める頃、新入生は摂理の礼拝への参加を勧められます。

摂理の礼拝には、日曜日の昼に行なわれる「主日礼拝」と、水曜日の夜に行なわれる「水曜礼拝」があります。これは、メンバーたちが自らの霊の糧であり、生活の指針であると考えられる御言葉、説教を聞くことが最大の目的です。そして礼拝の時間はメンバーにとって、説教を通してもっとも神と通じる濃密な時間でもあると言えます。

礼拝の日時になると、教会のメンバーたちは礼拝会場(教会として使われている住宅や、公民館の会議室など)に集まり、各自使命の働きや会場設営など礼拝の準備が進められます。司会が講壇に立ち礼拝が始まると、プログラムに従って、祈りや証し(生活の中での信仰体験を話す)、賛美などをして礼拝の核心である説教に向けて(霊的に)雰囲気を高めます。礼拝の核心である説教は、ここ数年は教祖が説教しているものが録音もしくは生中継で配信され、インターネット回線を利用して各教会で受信し、メンバーたちが聞いています。教祖は韓国人であるので説教は韓国語ですが、中継の間に日本語通訳官が入り日本の教会では日本語通訳を聞くことができます。また最近では説教をしている教祖の映像も配信され、テレビ画面で姿を見ることができます。メンバーたちは各自ノートを取ったり、パソコンで打ち込んで説教の内容を記録しています。インターネットによる音声配信技術が整うまでの時代は、説教の内容が各教会に原稿で届き(もちろん間に日本語通訳官が入りE-mailでのやり取り。)、礼拝では各教会のリーダーが原稿を読みながら説教をしていました。説教の内容は数時間にわたるものですが、教祖による詩や箴言が伝えられることもあります。

日曜日の主日礼拝では特に、一週間の指針である「主題」と聖書の聖句箇所が説教のために示されます。他、聖歌隊による特別賛美や教会献金の時間が持たれます。また、日曜日の昼からは二部礼拝という形で、スポーツをしたり、全体部署の活動の時間が取られています。水曜礼拝は週の中日ということで、主日説教に対して補足的な内容の説教が多いです。平日の夜ということもあり、特別賛美や献金の時間はなく内容としてはコンパクトです。

このような内容の礼拝の参加に新入生は、「学んできたBSは靈魂の基礎骨格となる御言葉であり、実は日曜日にはみんなで集まって生活におけるより実践的な御言葉を聞いているが、参加しないか。」という形で勧められます。この勧めを受け入れると、新入生の躓き(疑念)とならないように、礼拝の流れや多くの人(メンバー)が参加すること、献金についてなど説明を受けることでしょう。

新入生の多くが、このとき初めて集団的宗教要素を強く体験するわけです。これに対する抵抗感が大きい人もいるかもしれませんが、この時点で摂理の教義に対して、その絶対性を確信もしくは受認しているなら参加を望むかもしれません。メンバーから見れば新入生の礼

拝参加は、彼らの霊が生まれ独り立ちするようなものなので、非常に嬉しく思い、教会を上げて迎え入れるでしょう。

礼拝への参加がその新入生にとってより摂理での信仰にのめり込むものになるか、それとも躓きとなるかは様々ですが、宗教団体・集団としての姿を認識する場面にはなるでしょう。それまでに薄々気づいていたかもしれませんが、サークルに携わっていた人たちやBSの時に迎えてくれた人たち、そしてそれ以上に多い人たちが礼拝に参加しており、それだけでなく日本各地、世界各地において同じように教会があり、礼拝をもち、説教を聞いているという事実と直面するでしょう。そして、次第にそのサークルが伝道のためのものであることに気がつくでしょう。この事実に対して新入生がどう感じるかはそれぞれでしょうが、ほとんどの場合、礼拝に参加するまで、団体・集団・組織であることは新入生には明らかに示されてこないのです。

摂理の礼拝においては、洗礼式などのような信仰儀式的なものは一切ありません。また、信者登録の手続きなどありません。つまり、教義を信じているものが信者(メンバー)であると言えます。そのためメンバーと新入生の区別、線引きは実に曖昧なものです。つまり、先輩メンバーは新入生を徐々にメンバーとして扱っていき、新入生は繰り返し礼拝に参加しているうちに、いつの間にかメンバーになっていると自覚することになるでしょう。

ちなみに、この礼拝は、摂理のメンバー(礼拝参加を勧められた新入生を含む)以外の者は参加できません。つまり、誰でもが自由に摂理の教義を知ることはできないのです。摂理の教義を知るには、伝道され、証しを受けて、摂理側に選ばなければならないのです。

7、メンバーとしての活動

礼拝に参加するようになり、摂理のメンバーとして活動するようになってようやく、新入生は摂理がどういうところなのか把握し始めることになるでしょう。教会の仕組み、伝道のプロセス、摂理の規模、摂理の信仰者としての生活など、今までメンバーたちを見ながら疑問に思っていたことの多くが明らかにされるでしょう。しかし、摂理全体としての組織構造や、自分の将来に待つ結婚や就職や老後の問題、摂理での生活に関わる事項がどのように決定されているのか、献金の使途、教主国である韓国の様子、摂理初創期のこと、教祖の生活実態などといった、より摂理内部でのことや本当の意味での摂理全体像を知るには、摂理に長い人生を投資しなければならないかもしれないですし、投資しても明らかにされないかもしれません。

外部の者はこの団体を「摂理」という名前で認識していますが、新入生は自分が所属しているその集まりを「摂理」という団体名では認識しないかもしれません。そもそも団体名があるという認識がないでしょう。メンバーたちは自分たちを「摂理人(せつりびと)」と呼び、その集団を「摂理」呼んでいますが、団体の名称としての認識は薄いのです。摂理のメンバーたちは「歴史の中で自分たちが真に神によってたてられた集まりだ」と自認していますし、「全人類は摂理の教義を受け入れて摂理へと帰着すべきだ」と教えられており、「摂理こそが本来あるべき姿だ」と考えています。その理由で自分たちを括る名称は必要ないと考えているようです。しかし、メンバーとそうでない人を区別する必要があり、「神の主管されるところ」という意味の「摂理」という言葉を、現在、用いているようです(教祖のスキャンダルがマスコミに取りざたされる以前は「JMS」と名乗っていたが、以後はその名称を伏せている。)。

新入生はメンバーと生活の多くの時間をともに過ごしなが、徐々に摂理での生活を受け入れていくことでしょう。毎週水・日曜の礼拝への参加、伝道部署としてのサークルでの活動、メンバーだけの行事(特別礼拝やメンバーキャンプ)への参加や準備活動、朝のお祈り会への参加、BSの学習や聖書の通読、教会での日々の生活と、できる限り摂理へと時間と意識を投資していくこととなります。もちろん行事や礼拝は絶対参加という決まりはありませんが、摂理の教義を理解し受け入れているのであれば、信仰的側面からみて全員の参加が原則でしょう。訳あって不参加の場合も、教会のリーダーに相談・報告の上でのことです。メンバーになっても、自ら報告・連絡・相談という形での管理が続きます。

メンバーとしての生活に慣れ、成長すると「使命」が与えられることがあります。「使命」とは摂理における役割や任務、職務を意味します。教会をまとめる「リーダー」や「サブリーダー」、学生メンバーをまとめる「キャンパスリーダー」、学生メンバーを指導し教育する「幹事」、伝道部署をまとめる「部署部長」、教会資金の管理をする「会計」、説教を録音・管理する「文

書部」、写真や映像の記録・管理をする「広報部」、礼拝や行事などの運行を取り仕切る「総務部」、教会指導者や来客者の接待をする「渉外部」、特別賛美のための「聖歌隊」などは使命であり、メンバー各人の摂理におけるキャリアや個性によって与えられます。メンバーにとって使命は、自らの存在や個性を活かし摂理の運営に携われる場と言えますし、御言葉を実践し信仰を成長させるための場と言えます。教会のリーダーやサブリーダーは教祖が任命し、その他の使命は各教会のリーダーが任命します。

再臨主としての教祖は説教を通してメンバーの前に存在していますが、普段の生活をともにできるわけではありません。摂理の中では世界宣教中であり、摂理の外では海外逃亡中とされているので、そう滅多に会うことはできません(2001年12月以降、2004年1月現在まで教祖は公式には日本を訪れていない。)。教祖が自らの代行者として各教会に立てているのがリーダーだと言えます。それはヒエラルキーのなかで信者を管理するためであるでしょうし、メンバーにより現実味を帯びた形で教祖を認識させるためだとも考えられます。メンバーにはキリストに仕えるがごとく、その代理者である教会リーダーに接することが良しとされます。新入生を始めメンバーは、信仰の指導者としてリーダーと多くの時間を過ごし、リーダーから多く学ぶことを勧められます。リーダーとどのようにつながっているかが、再臨のキリストである教祖「先生」とどのようにつながっているかを縮小し示したものだということです。

このようにしてメンバーとしての生活に慣れてくると、新入生は自らが「伝道」に出かける必要性を感じ始めるでしょう。それは、摂理の教義として「神は多くの人がこの摂理に呼ばれ救われることを願っており、自分たちが本当にすべきことは多くの人に摂理の福音を伝える伝道である。」と教えられるからです。

受けた福音を多くの人に伝えたいと強く願う人もいるでしょうし、道端で見知らぬ人に声をかけることに抵抗を感じる人もいるかもしれません。が、摂理に残るためには、どんな形であれ伝道に携わらなければなりません。それは摂理自体が信者獲得(伝道)を糧として成り立っているからです。摂理が存在意義を果たし、この先永続的に存在するためには、信者の数を維持または増加させなければならないのが現状です。摂理における大半の意識とエネルギーは、現信者の保持と伝道の成功に注がれています。つまり、摂理における一般メンバーの存在意義は伝道であるとも言えるのです。

新入生メンバーは始め、先輩メンバーとともに伝道に出かけ、傍について、どのように声をかけ勧誘を進めるのかを学びます。ともに歩き語らうなかで、伝道とはなにか、どういう人に声をかければいいのかなど伝道の方法を聞くことになるでしょう。また伝道の時間は、信仰の話や世間話など、メンバー同士としての交流の時間にもなるでしょう。いずれ新入生メンバーは自らも声をかけ、サークルなど部署活動へと誘うことができるようになるでしょう。

摂理では数十人に声をかけて1人サークルへと顔を出せば効率が良いほうでしょうか。そのうち、継続してサークルに参加し、証しを受け、BSを聞き、メンバーになるのはそのうち十数人に1人ぐらいの割合でしょう。伝道を進めるのも容易なことではありません。

もし声をかけた新入生がサークルへと継続的に参加するようになったら、新入生メンバーはその人の管理者となります。先輩メンバーから管理の方法を学びながら、把握・管理と関係性の樹立 証し BS 礼拝へと、自分が導かれたのと同じように、新たな新入生を伝道していくようになります。が、簡単なことではありません。失敗を繰り返しながら研究し、伝道の成功を目指します。

また、メンバーとしての信仰生活を続け長くなれば、講師としてBSを伝える立場になっていきます。メンバーは過去に自分が聞いたBSの講義ノートや、教会に保管してある講師訓練用のBSを録音したテープなどを参考に講義案を作成します。教会リーダーのチェックを受け、合格であればその講義は伝えることができます。始めの頃は初級などの伝えやすい講義からはじめます。伝える技術を充分につけ、信仰的にも長くなるに従って、より後半の核心講義を伝えていくことができます。

またメンバーは、旧知の友人や知人を摂理のサークルに誘ったり、家族を摂理のイベントに誘ったりと家族や知人の伝道にも励むかもしれません。それは、自分が受けた本当に良いもの、救いにいたる真理を自分の大切な人たちに是非教えてあげたいと思うからです。

このようにして、摂理のことを全く知らなかった者が、いつの間にか気がつけば、自ら進んで人を摂理へと導く立場へと変わっているのです。

この摂理に出会った人は、「摂理には真理があり、救いがあり、本当に素晴らしい所だ。」と思って摂理で信仰を持ち活動するようになったわけですが、そこまでに至る過程の中で、他の宗教教義や観念と比較検討したり、信頼できる知人や家族など第三者の意見を聞いたり、十分に冷静に判断できるほどの情報と状況が与えられていたでしょうか。摂理へと導く側が、意図的に与える情報をコントロールしたり、思索する環境を操作するといった正しくない伝道手段が用いられているとすれば、それは誠実に向き合い、改善すべき問題点です。

メンバーにとっての伝道の意味

他の宗教の信者がそうであるように、摂理のメンバーにとっても伝道は、もっとも果たすべき使命・働きの一つです。それは教義の上で、「摂理で信仰をもち、救われる者が増えることを神が望まれている。」からです。神に従い、愛するという信仰心の現れとして、伝道活動に励むのです。また、隣人に善くする、愛を提供する最高の形として、全人的救済を説く摂理へと導くことなのです。

また一方で、伝道は信仰者としての義務と言えます。メンバー各人の伝道した人数(勧誘してメンバーにまでなった人数)は、信仰のパロメーター的役割を果たします。誰も伝道できていないとその人の命の保障はないとも教えられるほどです。また、逆に伝道が多くできた人は命が守られ、神の前で大きな義を積むことだと奨励されます。以前は「伝道王」といって1年間でもっとも伝道をした人に対して教祖から褒美を与えるという制度があったそうです。また、教役者になるためや、祝福結婚するためには規定人数以上に伝道している必要があります。ここに伝道人数において信仰的な競争原理がみられます。

また、教会をあげての伝道人数の競争があることも事実と言えます。関西の全教会の学生メンバーが参加する学生キャンプなどでは、教会ごとにどれだけメンバーが増えたかということが比べる対象になったり、キャンプや全体礼拝に向けて新入生の伝道スケジュールを進めるということがあります。

また、伝道することは霊的に命を残すことだと教えられます。「子供を産むためには夫婦の愛が必要なように、伝道して命を残すためには神様との愛の関係がなければできないことだ。」と言います。また、「子供を育てるには親の愛が必要なように、管理し新入生を霊的に育てるためにも新入生にも愛を注がなければならない。」と言います。

これらのことが、メンバーに伝道に対する意欲を与え、新入生に対して親切や情熱を注がせるのです。メンバーは、自分が伝道し管理し面倒を見た新入生の信仰的成長を、我が子の成長のように喜ぶのです。

また、「子供を育てる中でその親も人間的に成長するように、伝道を通してメンバー自身が信仰的に人間的に成長する。」と教えられています。

摂理で伝道に励むメンバーの多くは、ノルマ的な部分や競争的な部分があることも否定はできませんが、それ以上に、自らの信仰の成長や義を積むこと、真理に導くことで人が救われることを本当に願って、善意と愛を注ぎ伝道していることだろうと思います。

以上が、私が知りうる摂理における伝道のやり方のおおよそです。摂理が十分な正しさの中で伝道活動を進めているとは考えがたい現状であると思います。

このような状況の中で、摂理への導きを受けている新入生には、摂理で自分がこの先に受けるものは何かを、偏らない豊富な情報の元で熟考され、何を正しく選択すべきか冷静に判断し対応されることを望みます。

また、摂理で活動する人たちが真理を説き、多くの人々に救いを与えたいとせつに願っているのなら、この点に目を留めて考えることを望みます。摂理が現在このような方法と状況を取っているその意図を、偏らない考えで見つめるなら、摂理に対する理解と認識を正しくし、それに対して何をすべきかが明らかになることを、著者自らの経験をもって伝えます。